

授受表現の成立・発達の意味

著者	李 晶
雑誌名	筑波日本語研究
号	18
ページ	28-46
発行年	2013-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123030

授受表現の成立・発達の意味

李 晶

キーワード：授受表現、敬語表現、待遇表現、三語体系、多方面の授受表現、視点

要 旨

本稿は授受表現と敬語表現を待遇表現の下位に位置づけ、待遇表現システムにおける授受表現の成立・発達と敬語表現の歴史的变化との関連性を考える。具体的に (1) ～ (4) を考察した。

- (1) [ヤル：クレル]という対立の成立は授受表現システム内部の問題であると考ええる。
- (2) 授受表現の中でクレルが最も早く成立したのは丁寧語の発達の影響であり、モラウが授受表現として使われるようになったのは謙譲語 B の発達の影響によることであると考ええる。
- (3) 多方面の授受表現の成立は謙譲語 A の衰退が影響している。
- (4) 授受表現の三語体系について、待遇表現システムの観点から説明する。日本語が古代から近代へ移り変わる過程で、待遇表現システムの優位性が変化した[敬意表明が優勢→恩恵関係表明・内外関係表明が優勢]。優位性の変化により、待遇表現システムの下位に属する敬語表現システムは尊敬語・謙譲語・丁寧語という三語体系を保ちつつ、自動調整しながら変化していく。そうした変化を補うかのように、授受表現システムが成立・発達し、三語体系で安定している。

0. はじめに

本稿は近代日本語に成立し、そして発達した授受表現が日本語の歴史にもたらした意味を考える。本稿では「授受表現」を狭義の意味で用い、ヤル・アゲル・サシアゲル・クレル・クダサル・モラウ・イタダクの七語を指す。この七語は非敬語形（ヤル・クレル・モラウ）と敬語形（アゲル・サシアゲル・クダサル・イタダク）の対応があり、本稿では個別の動詞を取り上げる場合以外、七語のことを非敬語形のヤル・クレル・モラウで代表させ、論を展開していく。

1. [ヤル：クレル]という対立の成立について

授受表現ヤルとクレルの対立は授受表現システム内部の問題により生じたと考える。まず、[ヤル：クレル]はどのような対立であることを確認する。

1.1. [ヤル：クレル]という対立

周知のように、現代日本語における授受表現は基本的意味・構文・視点の制約において、表1のような特徴が見られる。

表1 授受表現システム

表現の種類	基本的意味	与益者	受益者	視点
ヤル	与える	主格(ガ格)	対象格(ニ格/ヲ格)	与益者【＝主格(ガ格)】
クレル				受益者【＝対象格(ニ格/ヲ格)】
モラウ	受ける	対象格(ニ格/ヲ格)	主格(ガ格)	受益者【＝主格(ガ格)】

表1から分かるように、ヤルとクレルは基本的意味<与える>、モラウは基本的意味<受ける>を表す。構文においては、基本的意味<与える>を表すヤルとクレルは与益者[＝与え手。以下同様]が主格(ガ格)、受益者[＝受け手。以下同様]が対象格(ニ格/ヲ格)となる。一方、基本的意味<受ける>を表すモラウは受益者が主格(ガ格)、与益者が対象格(ニ格/ヲ格)となる。視点においては、ヤルは主格(ガ格)に、クレルは対象格(ニ格/ヲ格)に、モラウは主格(ガ格)に、話し手の視点が置かれる。これらの格に現れる人物は話し手または話し手に近い人物に限られる。

このように、基本的意味<与える>を表すヤルとクレルは話し手の視点の置かれる格が異なる。[ヤル：クレル]の対立要素は視点である。[ヤル：クレル]という対立はなぜ成立したのか。これは古代日本語における物の授受を表す動詞システムと関係がある。

1.2. 古代日本語における物の授受を表す動詞システム

古代日本語においては、現代日本語のような授受表現システムはまだ成立していない。物の授受を表す動詞は非敬語形にクル・アタフ・ウク・ウ、敬語形にタマフ・タテマツル・タマハルが存在し、非敬語形に比べると敬語形が頻用されていた。タマフ・タテマツル・タマハルは一見、授受表現の[ヤル：クレル：モラウ]のように三語で物の授受を表すシステムを成しているように見える。しかし、タマハルはタマフの受け身形であり、タマフとタテマツルに比べ、活発ではないと思われる。

そのため、古代日本語における物の授受を表す動詞システムの中心はタマフとタテマツルである^{*1}と考えられる。

タマフとタテマツルは、本動詞と補助動詞の用法がある。本動詞として使われる時に（敬意が必ず伴う）物の授受を表し、補助動詞として使われる時に、授受と関係なく、発話に登場する人物に敬意を示す。また、基本的意味・敬意の対象・構文の関係は表2のようにまとめられる。

表2 古代日本語における物の授受を表す動詞システム*

表現の種類	基本的意味	敬意の対象	相当する授受表現
タマフ	与える	主格(ガ格)	ヤル
タテマツル		対象格(ニ格/ヲ格)	サンアゲル
タマハル	受ける	対象格(ニ格/ヲ格)	イタダク

*網掛けはタマフとタテマツルがシステムの中心になっていたことを示す

表2から分かるように、＜与える＞という基本的意味において、タマフとタテマツルが対立している。タマフとタテマツルは敬意の対象の置かれる格が異なる。[タマフ：タテマツル]の対立要素は敬意である。[タマフ：タテマツル]は、基本的意味＜与える＞において共通しているという点が授受表現の[ヤル：クレル]と同じである。

1.3. [ヤル：クレル]という対立の成立要因

1.1 節と 1.2 節で述べたように、[ヤル：クレル]という対立は「話し手の視点が置かれる格」が異なり、対立の要素は視点である。一方、[タマフ：タテマツル]

*1 近藤 1986 には、古代日本語における物の授受を表す動詞システムについて、以下のような記述が見られる。

（前略）古典語の場合には、授受動詞の非敬語形（敬意の視点に関する中立形）は極めて不活発であって、敬語形だけが生産的であったと言える。（中略）。授受動詞は基本的には「たまふ」と「たてまつる」のペアによって体系をなしているものと考えてよからう。（「たまはる」は言うまでもなく「たまふ」の受動形であるから除外してよい）現代語の「やる」「くれる」のペアに相当する区別は存在しないのである。

近藤 1986 p.97

古代日本語における物の授受を表す動詞システムについて、本稿の考えは上述した近藤 1986 に近い。

という対立は「敬意の対象が置かれる格」が異なり、対立の要素は敬意である。＜与える＞という基本的意味を表すというところが共通し、文のガ格やニ格（ノ格）に現れる人物への配慮が異なるため対立するという点において、古代日本語の物の授受を表す動詞システムと授受表現のヤル・クレルは類似している。この類似は、[タマフ：タテマツル]という対立と[ヤル：クレル]という対立の対立要素の種類が違うだけであると見ることができる。[タマフ：タテマツル]の場合は「敬意」、[ヤル：クレル]の場合は話し手の視点の「内外」である。そのため、[タマフ：タテマツル]という対立と[ヤル：クレル]という対立は、（それぞれ内部の）対立要素の種類こそ異なるものの、[ガ格やニ格（ノ格）に現れる人物に対して配慮があるという]共通点が見られるのである。

ここで「内外」という概念を説明する。話し手が、発話の登場人物の中で、どちらを自分に近い人物として捉えるか、どちらを自分に遠い人物として捉えるかを判断し、自分に近いと判断した方に感情を移入し、視点を置く。話し手が自分に近いと判断した人物、自分の視点が置かれる格は「内」のものであり、一方、遠いと判断した人物、視点が置かれていない格は「外」のものである。この「内外」の判断は心理的な距離の判断である。親疎関係など客観的な遠近関係は必ずしも心理的な「内外」関係と一致しない。また、発話場面により、同一人物に対する「内外」の判断が異なることもあり得る。このような話し手の感情移入、視点を置くこと、さらにいうと内外関係の定めは、能動文・受動文や自動詞・他動詞などの文法現象にも見られる。「内外」という概念は特殊なものではなく、一般的な概念である。

[ヤル：クレル]の場合は、構文において、与え手にあたる人物が文の主格（＝ガ格）に現れる。話し手の内外関係の判断によって、ヤルを使うのか、あるいは、クレルを使うのかが決定的される。したがって、[ヤル：クレル]という対立は発話の登場人物に対して、「内外」という配慮が行われていると考えられる。

このように、[ヤル：クレル]は「話し手の視点が置かれる格」が異なり、その背後に登場人物の（心理的な）遠近判断、即ち、「内外」という配慮がある。一方、[タマフ：タテマツル]は「敬意の対象が置かれる格」が異なり、その背後に登場人物の上下関係を判断し、どちらにどのように敬意を払うかという配慮がある。このように考えると、配慮の種類こそ異なるが、[タマフ：タテマツル]と[ヤル：クレル]は、ガ格やニ格（ノ格）に置かれる人物に対して配慮があるというところが共通する。

現代日本語授受表現に見られる視点の制約、特にヤルとクレルの視点制約の違いを考える際に、現代日本語授受表現のシステムだけで考えるのではなく、古代日本

語における物の授受を表す動詞システムを出発点として考えると、ヤルとクレルの対立、ヤルとクレルに見られる視点の違いは、古代日本語における物の授受を表す動詞システムの延長線上のことであると分かる。物の授受を表す動詞システムは昔から、＜与える＞という基本的意味で、格に対して配慮があった[＝古代日本語における物の授受を表す動詞システム]。時代が下るとともに、システム内の語彙が入れ替わるが、基本的意味と格に対して配慮があるという点においては、語彙が入れ替わっても、変わらない。ただし、待遇表現システムの優位性が時代によって変わる[敬意表明が優勢→恩恵関係表明・内外関係表明が優勢]ため、格に対する配慮の種類にも変化が生じる[詳細については第4節で述べる]。よって、授受を表す動詞システムは、＜与える＞という基本的意味において、「敬意」から「内外」という配慮の変化に伴い、現代日本語授受表現の[ヤル：クレル]という対立に移行したのである。従って、現代日本語授受表現のヤルとクレルに見られる対立（及び視点の制約の違い）は、古代日本語における物の授受を表す動詞システムにまで遡れる現象であり、授受表現システム内部の問題であると考えられる。

2. クレルが最も早く成立したこと及びモラウが授受表現として使われるようになったことについて

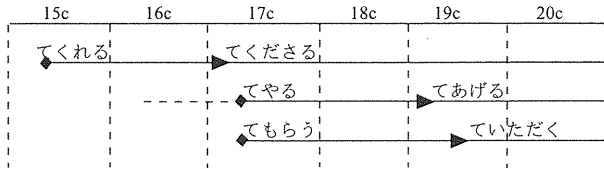
授受表現の中で、クレルは最も早く成立した表現形式である。また、モラウは本来授受を表すものではなかった。クレルはなぜ一番早く成立したのだろうか。そして、モラウが非授受表現から授受表現のシステムに入らなければならなかった理由は何であろうか。これらは敬語表現の歴史的変化と関係がある。

2.1. 表現形式の成立順序ークレルが最も早く成立したことについて

授受表現の補助動詞用法を対象に、抄物資料・キリシタン資料・狂言資料を中心に考察した先行研究、宮地 1975・1981 から、テクレルは抄物資料、テヤルとテモラウは狂言資料あたりから文献に見受けられることが分かる。授受表現の各補助動詞用法の成立時期については、宮地 1981 では（次のページの）図1のように図式化されている。

図1から分かるように、授受表現の中でテクレル系（テクレル・テクダサル）が最も早く文献資料に見受けられ、表現形式として最も早く成立した。テヤルとテモラウは文献資料に現れる時期がほぼ同時であり、表現形式として成立した時期の前後関係が明確ではない。しかし、荻野 2007 や李 2011 から分かるように、キリシタ

ン資料『天草版エソポ物語』には、補助動詞用法と思われるテヤルの用例がすでに存在した^{*2}。よって、テクレル・テヤル・テモラウの文献資料に現れる前後順序はテクレル→テヤル→テモラウである。



宮地 1981 p.18

図1 授受表現の成立

一方、授受本動詞としての初出用例は、以下の文献資料に確認されている。

- (1) かくとをくあしきはかげずみがえりくれたるなり^{*3}

落窪：巻4－250[森 2011b による]

- (2) 「いかで。鉢をやりてこそうけめ」とて、人々制しとめけり

宇治拾遺物語[古川 1995 による]

*2 『天草版エソポ物語』には、(1)～(3)のテヤルが補助動詞用法であると考えられる。

(1) バビロニヤへ諸国から掛くる不審をば、エソポが智略をもってたやすう開いてやり、バビロニヤから掛けらるる不審をば、他国から開くことが稀にあったと聞こえた。
天草版エソポ：432－15

(2) たちまち救いてやったれば、鼠は天の命を助かって
天草版エソポ：452－9

(3) そこで人々も大きに笑うて救いてやれば
天草版エソポ：417－1

(1)のテヤルは補助動詞用法であるについて異議がないが、(2)(3)は本動詞であるか補助動詞であるか、荻野 2007 と李 2011 の見解が異なる。李 2011 は共通の祖本として文語訳の広本が存在したであろうと思われる古活字本『伊曾保物語』を用い、『天草版エソポ物語』との対照をとおして、(2)(3)のヤルは「許してやる」という補助動詞用法のほうが妥当ではないかと述べた。詳しい内容は荻野 2007、李 2011 を参照。

*3 本稿では、先行研究の内容や用例を引用する際に、最も大切であると思われる箇所に、筆者（李）の判断で線が引かれている。以下では、とくに断りがなければ、引用部分の下線はすべて筆者（李）によるものである。また、用例を挙げる際に、作品名の略称、(巻数、)テキストでのページ数、行数という順に所収されている文献の情報を示している。対象となる語彙は太字、下線で明示する。

(3) 牛の売る者あり。買ふ人そのあたひをやりてうしをとらんといふ夜のま
に牛死ぬ 徒然草 第93段[古川1995による]

(4) 老杜カ錦衾ヲ人ニモロウテ有タレハ終夜盗ノ用心ヲ為ムツカシカツタ程
ニ夜ノ明ト同シヤウニ卷テカヘスソ 四河入海：一五ノ四―三四ウー―〇

文献資料に見受けられるヤル・クレル・モラウの授受表現としての本動詞用法の
用例の順序はクレル→ヤル→モラウである。

このように、文献資料に確認される用例の順序から見ると、授受表現がクレル→
ヤル→モラウという順に成立したと言える。これは授受表現システムがクレル系→
ヤル系→モラウ系^{*4} という順に表現形式が成立したと言い換えられる。授受表現の
中で、クレルが最も早く成立した。

2.2. クレルが最も早く成立した要因

授受表現形式の成立・発達の順序は敬語表現の歴史的変化と関係している。本稿
でいう「発達」は、表現が成立した後、使用頻度が高くなり、形式に多様性が見ら
れ、言語活動の中で活発に用いられることを指す。

まず、敬語表現の歴史的変化の特徴を確認する。

2.2.1. 敬語表現の歴史的変化の特徴

敬語表現は尊敬語・謙譲語・丁寧語に分けられる^{*5}。ここで、敬語表現の歴史的

*4 クレル系にはクレル・クダサル、ヤル系にはヤル・アゲル・サシアゲル、モラウ系に
はモラウ・イタダクが含まれる。七語の中、アゲル・サシアゲル・イタダクはクレル・ク
ダサル・ヤル・モラウに比べ、授受表現として使われるようになった時期が遅れる。クレ
ル・ヤル・モラウはクレル→ヤル→モラウという順で授受表現として使われ始めたと本文
中に述べた。クダサルに関しては、視点の制約が見られる、授受表現として使われる用例
の現れる時期がクレルに遅れ、ヤルより早い。クダサルを入れて順序をつけると、クレル
→クダサル→ヤル→モラウという順である。この順序から、クレル・クダサルは他の授受
表現より早く成立したことが分かる。つまり、授受表現システムはクレル系（クレル・ク
ダサル）がヤル系・モラウ系に比べ、早く成立したと言い換えられる。授受表現の成立に
関する詳細な記述は別稿にゆずる。

*5 敬語表現の分類法について、三分法説や五分法（尊敬語・謙譲語・美化語・丁寧語・
丁寧語）説がある。本稿は敬語表現の歴史も視野に入れているため、三分法に従う。

変化と思われる、古代日本語敬語表現と近代日本語敬語表現の特徴を言及した渡辺 1974 の内容を確認する。

(5) I、古代敬語では「品格保持」はもとより「聞手尊敬」も十分発達していないのに、近代敬語ではそれが非常に発達している。

II、古代敬語では「受手尊敬」は「奉る」「聞ゆ」、「卑下謙遜」は「給ふ（下二段）」、というように別々のものであったのに、近代語ではそれが重なるようになり、「卑下謙遜」の「致します」の類を、自分のみならず、肉親や同僚、聞手によっては上司などにも用いる傾向が強い。

III、古代敬語では「為手尊敬」と「受手尊敬」とは、「一聞え給ふ」のように、同時に両立し得たが、近代敬語で「一申し上げなさる」のような言い方は非常に困難となっている。

渡辺 1974 p.3

(5) の内容を本稿の用語で整理すると、(6) ～ (8) のようになる。

(6) 古代日本語敬語表現に比べると、近代日本語敬語表現では丁寧語が発達している。

(7) 古代日本語敬語表現では、謙譲語 A と謙譲語 B が別々のものであったのに対し、近代日本語敬語表現では謙譲語 A と謙譲語 B が重なるようになり、結果、謙譲語 B の方が発達している。

(8) 古代日本語敬語表現では、「一聞え給ふ」のように尊敬語と謙譲語 A を同時に使うことができたが、近代日本語敬語表現では同時に使うことが困難となっている。

つまり、近代日本語敬語表現は古代日本語敬語表現と比べ、丁寧語が発達し、謙譲語が衰退しているのである。具体的に謙譲語が衰退するとは、謙譲語 A（受手尊敬）が弱くなり、謙譲語 B（為手卑下）が強くなるという傾向を指す。(8) の「尊敬語と謙譲語 A は同時に使うことができなくなった」という二方面敬語の問題など、全ての現象がこの違い [= 丁寧語が発達し、謙譲語が衰退してくる（謙譲語 A が弱くなり、謙譲語 B が強くなる）] に起因している。

ここで、敬語表現システムの変化について少し深く考えてみたい。(6) の丁寧語の発達は聞き手に対する配慮が強くなることを意味し、(7) の謙譲語 B の発達は「為手卑下」「話し手が主格になり、ガ格で表示される」ことの発達を意味する。ここで、(6) はクレルの成立と関係し、(7) はモラウが授受表現として使われるようになったことと関係があると考えられる。

2.2.2. 丁寧語の発達と授受表現としてのクレルの成立

(6) の丁寧語の発達について考える。前節で、丁寧語の発達は聞き手に対する配慮が強くなることを意味すると述べた。その中でも、聞き手に対する配慮が最も強くなる発話場面とは聞き手が主格に現れ、発話現場にいる時であると推測できる。「聞き手が主格に現れ、発話現場にいる」且つ「授受表現を使用する」という条件を最も満たすのは、クレル(系)表現形式である。その中でも、とくに、クレル(系)を用い、聞き手に対して物や行為を要求する際に、聞き手に対する配慮が最も強くなると思われる。よって、丁寧語の発達と授受表現の場合のクレルの成立・発達とは関連しているといえる。

丁寧語の発達によって聞き手に対する配慮が強くなることと、授受表現の中でも聞き手に対する配慮を最も表せるクレルが一番先に成立したということとは、日本語史の中で平行して起きた出来事であると考えられる。つまり、敬語表現システムにおいて、聞き手に対する配慮の強化は、授受表現システム内のクレルの成立・発達という形で反映されているのである。(6) の丁寧語の発達という敬語表現システムの変化はその他の変化[(7) の謙譲語 B の発達、(8) の二方面敬語の問題]に比べ、早く起きている。そのため、授受表現システムの中でも、クレルが他の表現形式より一歩先に成立したと考えられる。

ここで「反映」という用語について少し説明する。敬語表現システムにおける丁寧語の発達と、授受表現システムにおけるクレルの成立・発達とは、きちんとした相互影響や、支配関係などが確認されるわけではないが、敬語表現の変化は何らかの形で授受表現の変化と関係性があると思われる。敬語表現に変化が起こったことにより、授受表現にも変化が起きているという意味で、全く無関係とは考えられないが、それ以上の具体的な相関メカニズムや本質的な関係や因果関係などがあるとは言にくい。本稿では、「反映」という用語をこのような意味で用いている。

また、前節で検討したように、授受表現[ヤル：クレル]の対立は授受表現システム内部の問題であり、古代日本語における物の授受を表す動詞システムから授受表現システムへと変化する過程において、丁寧語の発達の影響で、クレルが一番早く成立したと考えられる。授受を表す動詞システムのバランスを維持するように、クレルと対立するヤルがクレルの後に成立したと考えられる。この授受を表す動詞システムのバランスは、以前からの＜与える＞意味で二つの語彙が対立することによりできたものである。そして、[タマフ：タテマツル]という古代日本語における物の授受を表す動詞システムが崩れはじめたことで、授受表現システムが成立してくる。なお、授受表現システムが成立してくる際には、[ヤル：モラウ]や[クレル：

モラウ]という対立関係のものが先に成立したのではなく、[タマフ：タテマツル]と同様の特徴をもつ[ヤル：クレル]が先に成立した。さらに、この[＜与える＞意味、二語が対立する]のバランスを維持するために、クレルは成立・発達し、一方では、ヤルも成立した。

さらに、荻野 1997 に指摘されたように、授受表現が成立・発達する時期には、テクレルの用例が命令形形式テクレイに偏る^{*6}。筆者の調査では、クレルの本動詞用法の用例も同じく、命令形形式クレイに集中する現象が見受けられる。クレルの本動詞用法と補助動詞用法の用例が命令形形式に偏るという現象は、荻野 1997 で述べられたように授受表現の視点の成立と関係しているかもしれないが、丁寧語の発達とも関連している可能性がある。先ほど述べたように、授受表現の中で、クレルを用いて、聞き手に物や行為を要求すると、話し手の聞き手に対する配慮が最も顕著に現れる。クレルの聞き手に対する配慮を最大限で示す表現形式（＝命令形形式）に用例が集中することは、聞き手を大切にす、即ち、丁寧語が発達するという日本語の歴史の変化の流れに沿う現象であろう。

2.3. モラウが授受表現として使われるようになった過程

モラウは授受表現として使われる前後で、意味の焦点に変化が見られる。即ち、「入手成功」することが付随的であり、「乞い求める」ことが意味の焦点であったモラウは、「入手成功」することが焦点となり、「乞い求める」ことが付随的であるように変化した。授受表現としてのモラウは意味の焦点が変化した後のものである。

荻野 2007 によると、中世にはモラウの用例が見られる。しかし、いずれも「乞い求める」ことに焦点が当てられたものであると思われる。

(9) 人ニ物コフヲモラウ（ママ）トナツク如何

名語記（1268 年－75 年）巻 8[荻野 2007 による]

(10) 但青松院女房衆かゝ見・かたひら・わたほうし此参色もらい（ママ）被申候間、遣候也

北野天満宮史料目代日記・永禄一〇< 1567 > 年[荻野 2007 による]
抄物資料・キリシタン資料・狂言資料にも、(9) (10) と同じような「乞い求める」ことが意味の焦点であるモラウの用例が見受けられる。

*6 荻野 1997 は、補助動詞用例が命令形形式テクレイに偏ることが授受表現の視点の成立と関係していると指摘している。

- (11) 彼此只人テハナイソトテ糞テ飲テハトテモ酒手ヲハ償ワレタ事アラハヤ
チヤホトニ手シルシニヲコサレタル物ヲヘシ折テ責メウトモセヌン

史：六―三ウー〇

- (12) このやうに日ののどかな時は、磯に出て網人、釣人に手をすり、膝をか
がめて魚をもらひ

天草版平家：87 - 24

- (13) 惣じて某は、さやうの事いたひた事も御ざらねども、もらふてもくれぬ
程に、ぜひに及ぬ事で御ざる

ぼんさん：下 34 - 5

一方、「入手成功」することが意味の焦点であるモラウの用例も抄物資料・狂言資料に確認できる。

- (14) [= (4)] 老杜カ錦衾ヲ人ニモロウテ有タレハ終夜盜ノ用心ヲ為ムツカ
シカツタ程ニ夜ノ明ト同シヤウニ巻テカヘスン

四：一五ノ四―三四ウー〇

- (15) 某も都へのぼり、いなかの名を上てござる、あなたこなたへ参て、北野
からぎおんへまいらふとぞんじて、道にてしゆんきくを一枝もらふて、たぶ
さにさひて

ぼゝうがしら：上 245 - 8

このように、モラウは授受表現として使われる前後で、意味の焦点の変化が見られる^{*7}。

2.4. モラウが授受表現として使われるようになった要因

前述した (7)、謙譲語 B が発達してくることは授受表現としてのモラウの成立と関わる。謙譲語 B が発達してくるということは「為手卑下」「話し手が主格に現れ、ガ格で表示される」ことが発達してくるということである。「為手卑下」「話し手が主格に現れ、ガ格で表示される」ことを、授受表現の枠で考えると、モラウ表現形式にあたる^{*8}。謙譲語 B の発達は、授受表現システムにおいてはモラウ表現形式が新たに加えられることを通じて反映される。「～させてもらう・～させていただく」という表現は謙譲語 B が発達してきた、「為手卑下」の極端な現象であろう。

*7 モラウの意味焦点の変化に関する詳細な記述は別稿にゆずる。

*8 「一人称が主格になり、ガ格で表示される」ことは、授受表現の場合、ヤル表現形式に当てはまる。しかし、「為手卑下」のことも併せて考えると、モラウ表現形式しか当てはまらないと思われる。

3. 多方面の授受表現の成立について

丁寧語と謙譲語 B の発達の他に、敬語表現システムに見られる変化は 2 節で述べた (8) の二方面敬語の問題がある。謙譲語 A が衰退することにより、話題の人物に対する敬意が「(敬語) 本動詞 + 敬語補助動詞 1 + 敬語補助動詞 2」型で表現することができなくなる。しかし、「(敬語) 本動詞 + 敬語補助動詞 1 + 敬語補助動詞 2」型で表現できなくても、話題の人物に対する配慮を表す必要がなくなった訳わけではない。そうすると、異なる種類の配慮を表せるような新しい表現形式が必要となってくる。これは授受表現の場合、多方面の授受表現が成立してくることを通じて反映される。

3.1. 多方面の授受表現とは

授受表現には本動詞用法 (16) と (テ形接続形式の) 補助動詞用法 (17) がある。

(16) 太郎が花子に花をやった。

(17) 太郎が花子に花を買ってやった。

補助動詞用法に関しては、授受表現を重ねて使うこともできる。

(18) 太郎が花子に花を買ってやってくれた。

(18) の重ね型を「本動詞 + 授受補助動詞 1 + 授受補助動詞 2」型と呼ぶ。

また、授受表現の本動詞も授受表現の補助動詞と相互承接して使うことができる。

(19) 太郎が花子に花をやってくれた。

(20) (花子に対して) 太郎の花をもらってやってくれ。

ここでは、(19) を「授受本動詞 + 授受補助動詞」型、(20) を「授受本動詞 + 授受補助動詞 1 + 授受補助動詞 2」型と呼ぶ。

(18) ～ (20) のような授受表現、即ち、相互承接する授受表現を、多方面の授受表現と呼ぶ。多方面の授受表現は発話に登場する複数の人物への、恩恵の移動の (相互) 関係 (= 授受関係) を表すことができる。

(18) (19) が代表とする「本動詞 + 授受補助動詞 1 + 授受補助動詞 2」型、「授受本動詞 + 授受補助動詞」型の用例は、それぞれ以下の文献資料から確認できる。用例が見受けられる資料の成立年代の前後関係を考え、ここで「授受本動詞 + 授受補助動詞」型、「本動詞 + 授受補助動詞 1 + 授受補助動詞 2」型の順に用例を挙げる。

「授受本動詞 + 授受補助動詞」型

(21) ひまをもらふてくれひといふたれども

いしがみ：中－ 233 － 7

(22) (中国の者・すっぱ)「さては目代殿で御ざるか、それならばあづけまらせう程に、あれにやって下されな」 茶つぽ：下- 21 - 1

「本動詞+授受補助動詞 1 + 授受補助動詞 2」型

(23) 成程その格子とやら連子とやは、重ねての事にいたして、ただ其高雄様とやらに、今道中でお手を取り、お情と申た貧な男めと、知ら₁しま₂して貰₃ふてくれ 傾城禁短気：275 - 16

(24) 成程私は逢ますまい。其代に市松に逢てやって下₁さんせ、主も定て逢たかろ 夏祭浪花鑑：284 - 6

このように、授受表現が二つ相互承接する用例は狂言資料や近世期の資料に確認できる^{*9}。文献資料で確認できる多方面の授受表現の用例は単方面の授受表現 [= (17) のような、授受表現が一つしかない表現形式] より、遅れて見受けられる。多方面の授受表現は授受表現システムがある程度整えてから見られる現象である。多方面の授受表現の成立は謙譲語 A の衰退と関連していると考えられる。

3.2. 多方面の授受表現の成立要因

謙譲語 A が衰退することにより、話題の人物に対する敬意が「(敬語) 本動詞+敬語補助動詞 1 + 敬語補助動詞 2」型で表現することができなくなる。それを補うように、二方面敬語と類似する構造を持つ「(授受) 本動詞+授受補助動詞 1 + 授受補助動詞 2」という多方面の授受表現が成立し、敬意とは異なる種類の配慮、即ち、発話に登場する人物の間の恩恵関係を、明示するようになった。

待遇表現システムの優位性が時代によって、「敬意表明が優勢→恩恵関係表明・内外関係表明が優勢」に変化した(詳しいことは第 4 節で述べる)。そのため、多方面の敬意を表すよりも、多方面への恩恵関係を表すことが重要になってくる。敬語表現システムにおいては謙譲語が衰退してくる(謙譲語 A が弱くなり、謙譲語 B が強くなる)。待遇表現システムにおいては優位性が変化する。これらの二つの要因によって、「(敬語) 本動詞+敬語補助動詞 1 + 敬語補助動詞 2」型で二方面への敬意を表すことができなくなる。一方、多方面の授受表現は最初から存在したわけではなく、授受表現システムが成立し、ある程度整ってから文献に現れてくる。謙

*9 「授受本動詞+授受補助動詞 1 + 授受補助動詞 2」型、即ち、授受表現が三つ相互承接した用例は今回の狂言資料や近世期の資料調査に見られなかった。多方面の授受表現に関する詳細な記述は別稿にゆずる。

譲語 A の衰退による二方面への敬意表明の不可能を補うかのように、異なる種類の配慮、即ち、恩恵関係、授受関係を表すように多方面の授受表現が成立してきたのである。

4. 授受表現の三語体系について

第 1、2、3 節で述べてきたことから、授受表現の問題は常に敬語表現システムの変化と関連していることが分かる。本節では、授受表現はなぜ三語体系であるのかについて検討する。まず、授受表現システムは三語体系であることを振り返る。

4.1. 三語体系とは

授受表現の基本的意味・構文・視点の制約の特徴に基づいてまとめた表 1 をここで再掲する。

表 3（＝表 1） 授受表現システム

表現の種類	基本的意味	与益者	受益者	視点
ヤル	与える	主格(ガ格)	対象格(ニ格/ヲ格)	与益者【＝主格(ガ格)】
クレル				受益者【＝対象者(ニ格/ヲ格)】
モラウ	受ける	対象格(ニ格/ヲ格)	主格(ガ格)	受益者【＝主格(ガ格)】

表 3 を見ると分かるように、現代日本語における授受表現システムは〔ヤル：クレル：モラウ〕という三語体系である。授受表現はなぜ三語体系で安定しているのか。これは待遇表現システムの問題であると考ええる。

4.2. 授受表現が三語体系であることの要因

待遇表現を広義的に捉える際には、授受表現も敬語表現も待遇表現の一種であると考ええる。

4.2.1. 待遇表現とは

待遇表現について、菊地 1997 は以下のように述べている。

(25) 基本的には同じ意味のことを述べるのに、話題の人物/関手/場面などを顧慮し、それに応じて複数の表現を使い分けるとき、それらの表現を待遇表現という。

菊地 1997 p.33

菊地 1997 によると待遇の意味は、6つのタイプに分けられ、授受表現の補助動詞用法が表す恩恵の授受は待遇の意味の一種のようである。

(26) (前略)《待遇の意味》のタイプとして、基本的なものとしては、①《上下》、②《丁寧・ぞんざい・乱暴》、③《改まり・くだけ/粗野/尊大》、④《上品・卑俗》、⑤《好悪》の各種、やや広げれば⑥《恩恵の授受》を加えた六つを立てればよいかと考えている。

菊地 1997 p.36

また、坪井 2012a、2012b は授受表現が現代日本語において、待遇表現システムに欠かせない存在であることを指摘している。

(27) 現代日本語における授受表現は、古代日本語から続く敬語表現と組み合わされて大きく現代日本語の待遇表現システム（一般には「敬語表現」と「待遇表現」は同意に使われることが多いが、本基調報告では、「待遇表現」を単なる敬意を表す表現の意ではなく、もっと広く表現者、対者、関与する第三者間の人間関係の把握に関する表現の意で使っている。）を担っていると考える。

坪井 2012b p.8

このように、現代日本語において、待遇表現を広く捉えるときに、授受表現も敬語表現も一種の待遇表現であり、待遇表現の下位に存する。

4.2.2. 授受表現と古代敬語表現の類似点

前節（4.2.1.節）で述べたように、広義的に待遇表現を捉えると、授受表現も敬語表現も、待遇表現の下位的な存在であるといえる。実際には、授受表現は敬語表現と、特に古代日本語における敬語表現との間には、以下に見られるような三つの共通点が存在している。

(28) 同じく三語体系である。授受表現は「ヤル：クレル：モラウ」であり、敬語表現は「尊敬語：謙譲語：丁寧語」である。

(29) 相互承接して用いられる。授受表現は「(授受) 本動詞＋授受補助動詞」型、「(授受) 本動詞＋授受補助動詞 1＋授受補助動詞 2」型であり、古代敬語表現は「(敬語) 本動詞＋敬語補助動詞」型、「(敬語) 本動詞＋敬語補助動詞 1＋敬語補助動詞 2」型である。ただし、承接する際には、授受表現の場合はテ形接続形式であり、敬語表現の場合は連用形接続形式である。

(30) 種類は異なるが、主格や対象格に対する話し手からの配慮が見られる。授受表現は恩恵関係や内外関係の把握という配慮である。一方、敬語表現は

話し手の敬意をどのように示すかという配慮である。さらに、重ね型によって、主格と対象格に対して同時に、即ち発話に登場する全ての人物に対して、配慮することができる。

(28) ～ (30) の内容は表 4 のようにまとめられる。

表 4 授受表現システムと古代敬語表現システム

類似点	授受表現	古代敬語表現
三語体系	ヤル：クレル：モラウ	尊敬語：謙譲語：丁寧語
重ね型	①(授受)本＋授受補助 ②(授受)本＋授受補助 1＋授受補助 2	①(敬語)本＋敬語補助 ②(敬語)本＋敬語補助 1＋敬語補助 2
主格/対象格に対する 話し手の配慮	恩恵＋内外	敬意

表 4 が示している授受表現と（古代）敬語表現の類似性は偶然ではないと想定できる。

4.3. 待遇表現システム：敬意表明が優勢→恩恵表明・内外関係表現が優勢

待遇表現システムは時代によって、優位性が異なる。古代日本語から近代日本語に変わる過程で、待遇表現システムにも変化があり、「敬意表明が優勢である」から「恩恵関係表明・内外関係表明が優勢である」ように、優位性が変わっていると考える。待遇表現システムの中心となる、菊地 1997 でいう「話題の人物/聞き手/場面などの顧慮」、本稿の用語でいうと「話題の人物や聞き手や場面などに対する配慮」の種類、発話場面の把握の仕方は時代によって変化している。具体的に言うと、待遇表現システムは、古代日本語の敬意の表現の伝達から近代日本語の恩恵の移動や内外関係の把握、話し手の視点へと移行している。

授受表現も敬語表現も待遇表現の下位的存在であり、待遇表現システムの中で動いている。時代によって、待遇表現システムの優位性は変わる。待遇表現システムの内部で、その優位性が変わるのに対応するように、敬語表現システムは衰退するものもあれば、発達してくるものもある。それに伴い、授受表現システムが成立し、発達してくるという現象が見られる。この一連の現象は待遇表現システム内の自動的な調整によるものであると考える。ここで言う「自動的な調整」とは、敬語表現システムと授受表現システムに見られる一連の現象は、待遇表現システムの中で優勢な敬語表現システムから優勢な授受表現システムへと移り変わるという大きな流れに沿うものである。「自動的な調整」はその大きな流れの中に位置付けられるものであって、流れに逆らうような特別な現象ではない。

待遇表現システムの優位性の変化及びシステム内の自動的な調整は、授受表現システムが三語体系となり、安定することと関係する。待遇表現システムの内部では、敬語表現システムは尊敬語・謙譲語・丁寧語という三語体系であり、三語体系を保ちつつ自分なりに変化していく。待遇表現システムの優位性の変化及び敬語表現システムの変化に対応して、成立・発達してくる授受表現システムも、敬語表現システムと同じく三語体系でなければならない。

5. まとめ

宮地 1975 をはじめ、近年は森氏の一連の有益な研究が、授受表現と敬語表現の関係性に着目した。本稿もその関係性の解釈を試みた。本稿は坪井 2012a・2012b と同じく、日本語の歴史を巨視的に捉える立場から、授受表現と敬語表現を待遇表現の下位に位置づけ、待遇表現システムにおける授受表現の成立・発達と敬語表現の歴史的变化との関連性を考えた。この観点から、[ヤル：クレル] という対立の成立の要因、授受表現の中でクレルが最も早く成立した要因、モラウが授受表現として使われるようになった要因、多方面の授受表現の成立の要因、及び授受表現の三語体系であることの要因の解釈を試みた。

しかし、本稿にはまだ以下のような課題が残されている。これらの不透明なところについて今後さらなる検討を進めたい。

- I 待遇表現システムの優位性は具体的にどのように変化したのか。
- II 敬語表現の三語体系の構造と授受表現の三語体系の構造はそれぞれどのようなものであるか。
- III 敬語表現システムがいつ頃から、どのように授受表現システムの成立・発達に影響したのか。

参考文献

- 荻野千砂子 (2007) 「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』3 - 3 pp.1-16 日本語学会
- 菊地康人 (1997) 『敬語』 講談社

- 古川俊雄（1995）「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要』第二部 44 pp.193-200 広島大学教育学部
- （1996a）「日本語の授受動詞「下さる」の歴史的変遷」『広島大学教育学部紀要』第二部 45 pp.293-302 広島大学教育学部
- （1996b）「通時的観点から見た現代日本語における「くれる」の特殊用法」『広島大学日本語教育学科紀要』6 pp.45-52 広島大学日本語教育学科
- （1997）「狂言資料における授与動詞「呉る」「やる」の変遷」『広島大学日本語教育学科紀要』7 pp.145-152 広島大学日本語教育学科
- 小松寿雄（1963）「待遇表現の分類」『国文学 言語と文芸』5 - 1 pp.2-7 大修館
- 近藤泰弘（1986）「敬語の一特質」『築島裕博士還暦記念 国語学論集』 pp.85-104 明治書院
- 坪井美樹（2005）「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学』82 - 11 pp.13-25 東大国語国文学会
- （2012a）「古代日本語から近代日本語への変化－現代日本語の特質の形成（授受表現の発達を例として）－」『日本語教育』第 59 輯 pp.1-8 韓国日本語教育学会
- （2012b）「日本語における敬語表現と授受表現の歴史的変遷」第二回北京師範大学－筑波大学「中日言語文化の交流と共有」シンポジウム予稿集 pp.4-9 北京師範大学
- 宮地裕（1975）「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」鈴木知太郎博士の古稀を祝う会編『鈴木知太郎博士古稀記念 国文学論攷』 pp.803-817 桜楓社
- （1981）「敬語史論」『講座日本語学 9 敬語史』 pp.1-25 明治書院
- 森勇太（2010）「行為指示表現の歴史的変遷」『日本語の研究』6 - 2 pp.78-92 日本語学会
- （2011a）「申し出表現の歴史的変遷－謙譲語と与益表現の相互関係の観点から－」『日本語の研究』7 - 2 pp.17-31 日本語学会
- （2011b）「授与動詞「くれる」の視点制約の成立－敬語との対照から－」『日本語文法』11 - 2 pp.94-110 日本語文法学会
- （2011c）「やりもらい表現の歴史」『日本語学』30 - 11 pp.28-37 明治書院

- (2012)『日本語授受表現の歴史語用論的研究－策動表現における敬語との相互関係－』 大阪大学 博士学位論文
- (2013)「近世上方における連用形命令の成立－敬語から第三の命令形へ－」『日本語の研究』9－3 pp.1-16 日本語学会
- 李 晶 (2011)『『天草版平家物語』と『天草版エソポ物語』における授受動詞について』『筑波日本語研究』15号 pp.39－55 筑波大学人文社会科学研究科 日本語学研究室
- 渡辺実 (1974)「昭和四十八年度秋季国語学会大会（記録）討論（ラウンドテーブル）近代敬語の研究をめぐる」『国語学』96 pp.33-41 国語学会

調査資料

竹取物語：片桐洋一等（校注・訳）（1994）『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集 12、小学館；土佐日記：菊地靖彦等（校注・訳）（1995）『土佐日記 蜻蛉日記』新編日本古典文学全集 13、小学館；落窪物語：三谷栄一等（校注・訳）（2000）『落窪物語 堤中納言物語』新編日本古典文学全集 17、小学館；源氏物語：阿部秋生等（校注・訳）（1994）『源氏物語』新編日本古典文学全集 20、小学館；平家物語（百二十句本）：水原一（校注）（1979-1981）『平家物語』新潮日本古典集成第 25・37・47 回、新潮社；史記抄・四河入海・毛詩抄・蒙求抄：岡見正雄・大塚光信（編）（1971）『抄物資料集成』第一巻～第六巻、清文堂出版；天草版平家物語：近藤政美等（編）（1999）『天草版平家物語 語彙用例総索引（1）』勉誠出版；天草版エソポ物語：大塚光信・来田隆（編）（1999）『エソポのハブラス 本文と総索引 本文篇』清文堂出版；大蔵虎明本狂言集：池田廣司・北原保雄（1972-1983）『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社；古活字本伊曾保物語：前田金五郎等校注（1975）『仮名草子集』日本古典文学大系 90、岩波書店；国文学研究資料館：『日本古典文学大系』本文データベース（日本古典文学大系シリーズ 岩波書店）；新潮文庫の 100 冊：新潮社（1995）『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』

り しょう／人文社会科学研究科
（2013 年 10 月 31 日 受理）